広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	美しく生き美しく死ぬ : 武士道の死生観
Author(s)	李, 璐璐
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 , 21期 : 103 - 120
Issue Date	2007-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038832
Right	
Relation	

美しく生き　美しく死ぬ
−武士道の死生観−

李璐璐（リ・ルル）

一、はじめに

私が武士道に感性的なイメージを持つのは映画「ラスト侍」を見たからだ。かつて南北戦争で手柄を立てた英雄だった大尉は戦争が終わると移り変わる時代に取り残されてすっかり落ちぶれていたが、侍と戦う為に政府に雇われて日本にやってきた。そんな彼は侍一族の村で武士道というものが身に染み付いて人生を変えたという話である。もちろんフィクションだが、腰には武士の魂と言える刀を携えて戦場で勇ましく戦った侍たちの姿が生々しく描き出されていただけではなく、「忠」「誠」「礼」「義」「仁」「勇」などの武士道の精神も十分伝わってきた。映画の中での厳かな切腹の場面や舞い散った桜の花びらを浴びて英雄が戦死したシーンなどには私は強く胸を打たれた。「人も桜もいつかは散る。吐息の一つ一つに、茶の湯の一杯に、敵の一人一人に、生命が宿っている。それは忘れてはならぬ。それは武士道だ。」侍一族の長であり深く敬われた英雄―勝元の言葉もとても印象深かった。その後で新渡戸稲造の『武士道』を読んだことで武士道に対して理解がすこし深まったように思う。その内、「生」「死」は侍にとって一体どんなものかについて関心を持つようになった。本レポートは武士道の死生観を明らかにしたいと思う。

二、研究方法

武士道という時、「行動形態としての武士道」と「思想としての武士道」との二つの面があるので、本レポートはまず、武士についての軍紀物語や言行録や遺訓などの材料を使って行動の方面から武士の生き方や死に対する態度を考察する。また、思想としての側面つまり武士道名書を取り上げて武士道の精神を理解する上で、武士道の死生観のいくつかの特徴をまとめる。

三、武士道

１、武士道の定義

まず、武士道とは何ものかを見てみよう。字義的に見れば、武士道とは即ち「武士がその職業においてまた日常生活において守るべき道を意味する。一言にすれば『武士の掟』、即ち武人階級の身分に伴う義務である。」（『武士道』p-26）武士の起源と言えば、「律令性の崩壊の中から新たに生まれた私有地荘園の自衛と秩序の為に、荘司や名主（地方豪族）を中心に武力的自衛団の形成」が考えられる。（『武士行動の美学』p-146）つまりよく知られた侍だ。この意味では武士道が発生する土壌は封建制だとわかる。思想史の視点から見れば「武士道はその表徴たる桜花と同じく、日本の土地に固有の花である。」と新渡戸稲造が言ったように、武士道は日本で生まれた「日本人固有の伝統的道徳観」と言ってもよかろう。

２、武士道の淵源

新渡戸稲造によれば、武士道の根源はまず仏教、神道による。仏教からは「運命に任すという平静なる感覚、不可避に対する静かなる服従、危険災禍に直面してのストイック的なる沈着、生を賤しみ死を親しむ心」を、神道からは「主君に対する忠誠、祖先に対する尊敬、ならびに親に対する孝行」といった「服従性」を学んだ。神道の祖先崇拝によって皇室が全国民の共通の遠祖となったから、「神道の教義」には、武士道の重要な精神「愛国心および忠義が含まれている」。また、「厳密なる意味においての道徳的教義に関しては、孔子の教訓は武士道の最も豊富なる淵源であった」。孔子の「政治道徳」は統治者である武士に相応しい。孔子に次いで孟子の「平民的なる説」が武士道に影響を与えた。

「かくのごとく、その淵源の何たるを問わず、武士道が自己に吸収同化したる本質的なる原理は少数かつ単純であった。少数かつ単純であったが、我が国民歴史上最も不安定なる時代における最も不安なる日々においてさえ、安固なる処せ訓を供給するには十分であった。」（新渡戸稲造の『武士道』p32-37）特定の時代の下に、武人の特殊の性質、以上の思想を吸収する上で、新しい男道を形成したと新渡戸稲造は述べる。

３、 武士道の根本精神

3．1 忠

武士道の多くの徳目の中に、最高の位置に置かれるのは忠だと思われる。「忠」というのはその文字通り、自己の真心を尽くすことだ。「広義の忠の対象は道徳全般に関するもの」だが、日本の武士社会においては「忠」の意味は武士にもっとも影響の深いもの――主従関係によって限られている。簡単に言えば即ち「従の主に対する道」の現れだ。「忠」を生ずる要素はいろいろあるが、「報恩の情」は第一に数えられる。「無限の君恩に対しては、無限の報恩があるべき」だ。臣が恩に報いる為に一生懸命やるのは「忠」を尽くすと言える。「武士の忠が無限の報恩であり、その無限の報恩が無我の意識の上に立っているので、秋霜烈日のような壮挙が現れることができる」。（『日本武士道詳論』）『平家物語』『保元物語』なかの武士についての無数の美談が実際は武士の「忠誠」な心を讃えているのではないか。

3．2 義

「義は武士の掟中最も厳格なる教訓である」。武士にとって卑しい行動を絶対とっては行けない。「武士たらむものは、義、不義の二つをとくと心に会得仕り、専ら義を務めて、不義を戒しむべきとさえ覚悟仕り候へば、武士道は相立申候」（『武道初心集』「義不義」）といったように「義」こそ武士道の核心をなすものだ。「義不義と申は、善悪の二つにして、義は即善、不義は即悪に候。」義を行うのが三つのクラスがある。第一は心には邪念が起こっても良心に苛まれて義を実践する。即ち「心に恥ぢて義を行ふ」。第二は他人の目を怖がって世間体を繕うために仕方なく義を実践する。即ち「人を恥ぢて義を行ふ」。しかし、「心に恥ぢて義を行ふ」、又は「人を恥ぢて義を行ふ」ではなく、心には邪念が起こらず、外面的圧力に支配されることでもな

く、ありのままに自然に義の道を歩む武士が理想の武士である。

3．3勇

何故「勇」にも重点を置いて説明するかと言うと武士道においては「勇」が「忠」と「義」と切り離せない関係を持っているからだ。「勇気も忠誠の志があつて、初めて道徳的な値打ちがある」「勇気は、義のために行われるのでなければ、徳の中に数えられるにほとんど値しない」この二つの言い方を見れば「勇」は「忠と義」のおかげで初めて道徳の意味が賦与されたように思われるが、実は「勇」がないと「忠と義」が決して果たせないほど「勇」は武士にとって欠かせない精神だ。確かに「勇」はいつでも賛美に値するものとは言えない。たとえば「匹夫の勇」などは責められるべきである。武士道においては「生くべき時は生き死すべき時にのみ死する」のは「真の勇」だ。日本武士の勇気は悉く忠誠の心から発しているのだ。忠と義と勇と、道徳的に繋がつているところに、日本武士道の精華があるのだと言ってもいいだろう。

3．4名誉

「名誉の感覚は人格の尊厳ならびに価値の明白なる自覚を含む。したがってかの生まれながらにして自己の身分に伴う義務と特権とを重んずるを知り、かつその教育を受けたる武士を、特色づけずしては措かなかった。」（『武士道』p-72）主君に対する奉公が武士の義務である。その職責を果たすために武士が主君に対する無比の忠誠や忠義および勇気が要求された。「忠」「義」「勇」三つの徳を兼ね備える武士が最も理想的な武士だと考えられる。自分が武士らしい武士だという名誉を武士が何より重視している。「双なき名将勇士と云へども、運命尽ぬれば、力及ばず、されど名こそ惜しけれ。東国の者共に弱気見ゆな。いつの為に命をば惜しむべき。唯是のみぞ思ふ事」（『平家物語』）戦国時代、戦闘員としての武士は自分の命を天に任す。すべての願望を断ち切らざるをえないときがよく迫って来る。そういうとき、武士にとってただひとつだけ大切にしないといけないものがある。それは、武士らしい武士という名を惜しむことであり、名を追求する武士は当然ながら「廉恥」を重んじるのである。名を惜しむことと恥を知ることとは本質には同じものだ。「廉恥心は少年の教育において養成せらるべき最初の徳の一つであった」（『武士道』）命への執着や主君への裏切りなどは武士にとってこの上のない恥辱である。名誉は武士の死生観を語る時、欠かせないキーワードのひとつだ。

四、武士

１、武士の覚悟

覚悟という言葉が武士にとって何より重要だ。武士の覚悟は一体どんなものかについて理屈で説明する前にはまず一つの話を見てみよう。

一人の武士が柳生但馬守のところへ武術を学ぼうと頼みに来た。「武術の稽古をやったことがあるだろう」と聞かれたら「いや、ない」。「弓とか槍とかやったのではないか」と但馬守がまた聞くと「いや、やらなかった」という。但馬守はびっくりして「でも、何かしていただろう」とさらに訪ねると、その武士はこう答えた。「私は武士にとって死ぬ覚悟が何より大切だと思い、何度も心の中で死んだ。」但馬守は微笑みながら「そういう覚悟があればもう武術なんかいらな

い」とほめたという話だ。（菊池寛「武士道の話」『武士道の神髄』所収）弓術や剣術などを身に付けないと戦場で敵とうまく戦うことが難しくなるに違いない、しかし、武士が身に付けないといけないのは決して完璧な武術だけではない。いつでも主君の為に自らの命を捨てる心構えがなければ、自分の職責を果たすことができないだろう。常に死を意識して過ごさないと、いざという時に逃げ隠れせずに命を捧げることもできないだろう。

この話から分かるように、武士の覚悟はすなわち死の覚悟である。武士である以上は、死を恐れてはならない。武士社会においては、死の覚悟が「彼らが武士であることの基本の問題」だと見なされる。

死の覚悟を分析するとき、二つの場、つまり「公の場」と「私の場」に分ける必要がある。「公の場」は武士にとって当然のことに戦場を意味している。戦場では、武士は「弓矢とる身の習」・「坂東武者の習」が自覚されねばならない。この「習」が簡単な言葉で表せば、「捨身」が最も適切だと思う。「捨身」を「戦場における主君への奉公の仕方」として武士が心の中で覚悟しておくと、「私の場」においても武士の「あるべきあり方」として実行せざるをえない。「私の場」という時、喧嘩の例を取り上げないといけないだろう。武士の喧嘩とは、双方の意見が衝突したり、あるいは紛争が起こったりした時、武力に訴えて解決しようとする行為だ。命をかける行為だからどちらかが命をなくしても不思議ではない。戦国時代、つまり戦力がごく重要だと考えられる時代では、戦力を保つ為に「喧嘩両成敗」という法令が作られ、喧嘩という私の犠牲行為が禁止されていた。しかし、この法令は武士に受け入れられず、しばしば批判されていた。相手から侮辱を与えられた時、堪忍するのが武士らしくなく、臆病だと考えられるゆえに、武士が公然にこの禁令を破って抜刀して決闘することを選んだ者も少なくなかった。刀を抜くその一瞬、武士は死を覚悟に違いない。

２、 武士の死に方―切腹

切腹は一体どんな意味を持っているのか、なぜ武士がこの一番苦痛を連想させる死に方を選ぶのか論じよう。切腹はまた「ハラキリ」という。この「ハラキリ」は立派な日本語の言葉として世界中によく知られている。日本の侍と言ったら直ぐ切腹のイメージが浮かんでくる人が少なくないだろう。外国人にとってはこの残酷な自殺の方法がどうも理解できないそうだが、切腹は武士の哲学的思想的死生観を象徴するのだ。武士階級が歴史の舞台に立って以来、切腹の話が日本史に不可欠な一部分且つ最も特色のある一部分となった。さて、なぜ「特に身体のこの部分を選んで切る」かというと、「これを以て霊魂と愛情との宿るところとなす古き解剖学的信念に基づくのである。」と新渡戸稲造が合理的な解釈を与えた。切腹は決して単なる自殺の方法ではなかった。「それは法律上ならび

に礼法上の制度であった。中世の発明として、それは武士が罪を償い、過ちを謝し、恥を免れ、友を購い、もしくは自己の誠実を証明する方法であった。」（『武士道』p-100）

谷田左一の『敵討と切腹』によると、真の武士であるものが本務の遂行と生命の保存とが、到底両立することができないと覚悟したとき、喜んで生を捨てて死を選んだという。死を通して道を踏み、義を通して生を律しようとするものだ。切腹は、自由意志の発動に基づく自殺の精神と一殺多生の仁恵的精神との融合に根基をおく点にその精彩がある。古来武士は死に対しては潔く散る桜のようである。これは必ずしも武士の頭が単純であっただけだとは言えなく、そこに無限の責任感における真剣味があった。武士の人格の維持にとって意味深い。

この切腹の意義が理解出来ないと、武士の死生観を理解しようとしても無理に違いないだろう。まず、目につくのがこの普通の人から考えられない自殺の仕方だ。一般の人々が自殺を選ぶのはやはり生きる苦しみに耐えられなく、楽になりたいと思っているからである。当然ながら、多くの人々はできるだけ痛みのなく楽な死に方を探す。しかし、武士が死を選ぶのは決して生きるのがつらくて冷厳な現実から逃れようとするからではない。それどころか、真の武士にとっては、乱暴に死に急ぐことや死を媚びることは卑怯であり、武士道の教えは、すべての困難、逆境にも忍耐と純潔な心を持って正面から向き合うことだった。死を避けるのは弱虫の行為だと見なされて、死を軽蔑する行為こそ勇気の印だとされた。しかし、生きるより死ぬ方が楽な場合は生きることが真の勇気であった。では、なぜ武士が自ら死を選ぶかというと、武士らしい武士という名誉を守るためにある。「我はわが霊魂の座を開いて君にその状態を見せよう。汚れているか清いか、君自らこれを見よ」。この名誉を重んじる念は武士の自ら命を絶つ理由となった。

３、武士の魂―刀

日本のお城に陳列される展覧品の中には各時代の様々な刀が不可欠である。見学に行った時、特に印象に残っているのはたくさんの装飾が鞘や柄になされていたことだ。新渡戸はこれを「所有者の虚栄心」の表現で「怖がるべき武器」に「その恐怖の半ば」を失わせたと批評したが、武士の刀に対する愛の印にもなるのではないかと私は思う。「真物の刀を腰に挿すこと」によって始めて武士の資格が認められた。刀は武士にとってごく重要な意義がある。戦場で刀を使って君主への忠義を尽くす。敵の刀のもとで戦死することも覚悟しなければいけない。一旦負けたらまた刀で自らの命を絶つことを通じて自分の名誉を守る。この意味で言えば武士が「帯に佩ぶるものは心に佩ぶるもの――忠義と名誉の象徴」である。刀から離れれば武士も生きていけないし武士道も存在しない。刀は武士の魂と言えるほど神秘な力を持ていった。武士は刀に対して「尊敬のあまりほとんど崇拝」まで至っていた。刀を跨いだり踏んだりすることは絶対許せない。刀に対する不敬は武士本人に対する侮辱と同じように見なされていたのである。当然のことに刀鍛冶も「単なる工人ではなく」「霊感を受ける芸術家」までに地位を上げて価値を置かれた。刀を鍛える過程さえ「厳粛なる宗教的行事」だと信奉される。刀がそこまで尊敬されるのは武士が生と死に対して宗教的な不思議な感情を持つということの一つの現れだと考えてもいいだろう。

五、日本史における偉大な武士像

１、源平武将―名誉

「乱世には英雄が現れる」。風雲を巻き起こす源平武将が忠誠、節義、勇武で立派な「戦場の精神史」を綴った。

武士道は中世の封建制度とともに発達した。封建制度の下で、武士と直接生活の資料を給与する主君との間に特別な主従関係が結ばれていた。主君の恩に対して武士は奉公せねばならない。しかし、この主従関係は単なる利害関係にとどまらず、「精神的な要素」も含まれている。合戦において、武士は確かに主君の為に戦うのだが、自らの価値も実現しようとするに違いない。つまり、「武士としてあるべき身の処し方、正当な生き方」を求めたのである。

では、戦場においては、真の武士らしい生き方とはいったい何だろう。「坂東武者の習、大将軍の前にては、親死に子討たれども顧みず、弥が上に死に重なって戦ふとぞ聞く」という源為朝の言葉ははっきり答えを与えてくれると思われる。親も子も自分の命も全部犠牲にしてもいい。この「主への絶対的な献身」精神こそ武士が選ぶべき道だ。

屋島の合戦で、主君源義経の身代りとなって討死した佐藤継信はこの「己を生かし主を生かす道」をよく理解していたと言えるのではないか。「弓矢とる身の習也。敵の矢に中つて主君の命に替るは兼ねて存ずる所なり。」（『源平盛衰記』四十二）と継信が雄々しい遺言を残した。身代りは戦場において最も勇気や自覚や強い意志力がいる果敢な犠牲行為だと思う。無論普通の戦死の場合も主君に対して忠義を尽くし、いざというときは命も捧げる覚悟の現れだが、あえて言えば戦場においては、「受動的」な性質も持っている。それに対して、身代りは全く自分の意志から出発する行動であり、主君への献身精神の極限だ。自ら選んで自分の命を犠牲にして主君の安全を守る。「忠」「義」「勇」の精神を常に胸に秘めて「死の後の名こそ惜しけれ」という信念を持って生きていかないと、この英雄の壮挙は決して遂げられないだろう。

「合戦において死に直面した武士は、おのれの名に恥じず、武士らしく生きたかという名のみ惜しみ、そのよき名が末代までも語られることを望んだ」。（『武士行動の美学』p-13）屋島の合戦で自らの安全を顧みずに海に落ちた弓を拾い取った源義経の話がなかなか有名だ。ただ自分の弱い弓が敵に拾われたら嘲られるのだろうと思ったために「命にかえても取り返した」。戦場で戦うとき、精神を極度に緊張させないといけない。少しの不注意で命が奪われてしまうかもしれない。余裕がないはずなのに、義経は毅然として危険性の高い行動をとった。なぜなら、彼にとって命より守りたいものがあったのだから。即ち名誉だ。

一谷の合戦において熊谷直実に呼ばれたために岸の方には源氏の兵が大勢いるにもかかわらず単騎引き返したわずか十六歳の平敦盛の勇気に心を打たれない人はあまりいないだろう。戦場で敵から逃げる姿を見られるほど恥なことは無い。「返したまえ」と相手に言われたら引き返し

て戦うのが「名を惜しむ武士のとるべき習」だ。若い少年に対して惻隠の心にほだされた直実に助命してもらうこともできたが、あえて「首を討って」と命令した敦盛は「死の潔さが覚悟されている」に違いない。

２、楠木正成―報国

「日本史上の人物で最も尊敬する人は誰か」と聞かれたら楠木正成の名を挙げる人が多いだろう。「国民精神の活模範」として讃えられるこの南北朝時代の武将は知略にたけた兵術家であっただけではなく、天皇への忠義を尽くすという高尚な品格の持ち主でもあった。

正成は千早城・赤坂城などでの見事な戦いで、幕府の大軍を苦しめて建武中興の基礎を作り上げた。しかし、自分の正しい意見を聞き入れてもらえず、不利な情勢に陥って、とうとう足利尊氏の大軍と正面から戦う日を迎えた。

「今はこれまでなり」と述べながら正成は潔く湊川の合戦に赴いた。足利の巨万の大軍に対して、わずか７００人を率いる正成の軍勢は衆寡敵せず、とうとう敗れた。正成の最期の状景について『太平記』の中ではこう記述されている。

「正成上座に居つつ、舎弟の正季に向かつて、抑抑最後の一念に依つて善悪の生を引くといへり、九界の間に、何か御辺の願なると問ひければ、正季からからと打ち笑ひ、七生まで唯同じ人間に生れて朝敵を滅さばやと存じ候へと申しければ、正成よに嬉しげなる気色にて、罪業深き悪念なれども、我もこの様に思ふなり、いざさらば同じく生を替へて、此本懐を達せむと契つて、兄弟共に刺し違へて、同じ枕に伏しにけり。」

何度死んでもやはり人間としてこの世に生まれてきたからには、賊を滅ぼさなければという。正成の強い信念に尊敬を払わずにはいられない。武士道の死生観は仏教から深い影響を受けているが、完全に一致するとは言えない。正成の死生観ははっきりと両者の異なる点を明らかにしていると思われる。

一般的な考えでは、生と死は長い且つ短い人生旅程の起点と終点であり、高い産声とともに人間はこの世の旅を始めてあらゆる辛酸苦楽をなめ尽くし、また死の訪れによってすべてが消えてしまうと考えられている。では、この人生旅程に苦しみやつらさが満ちているとしたら人間はどうすればいいのだろうか。封建時代に、仏教は「輪廻転生」の旗を掲げながら「極楽」という理想的な世界を作り出し現世での苦難を辛抱してその試練を乗り越えれば死後は必ず「極楽」に行けると一生懸命人々に説いていた。仏教の未来観は苦しんでいる人たちに精神的な慰めを与えただけではなく、統治階級が百姓を見やすく支配する役割も果たした。

同じように死はすべての終わりではなく、新しい命の始まりだと武士道の死生観でも信じられているが、武士が求めたのは死んだ後、極楽世界に行くことではなかった。それよりも死んで霊魂となっても主君に対して忠誠を尽くしたいという願望を抱いていた。正成にとってこの忠誠の

対象は後醍醐天皇であった。当時、利に駆られて多くの武士は足利の側に集まったに対して、屈せずに死んでも皇室に裏切らず、賊を滅ぼすように奮闘し続けると誓った正成は純忠の人、節儀の人として崇敬されるのも当然なのではないか。

では、正成は本当に再生できたのだろうか？「七度も生き返りつつ夷をぞ攘はん心吾忘れめや」これは幕末において憂国志士の吉田松陰がその著作である『留魂録』に載せた歌である。「七生滅賊」の精神本質と違わないだろう。それにとどまらず、かつて日露戦争の際、旅順港口閉塞隊を指揮していた最中に戦死した「軍神」と呼ばれる広瀬武夫が作った「正気歌」もなかなか有名だ。其の最後の「誠哉誠哉毙不已。七生人間報国恩」という部分も「七生滅賊」の死生観を受け継いだと思われる。正成の肉体はもうなくなったが、「七生滅賊」の精神が永遠に消滅することはない。つまり一人の正成は死んでしまったが千万の正成は生まれ変わった。正成の精神が「国民的普遍生命」となったという意味では、正成が「不死性」を得たと言ってもいいだろう。

３、赤穂浪士―復讐

赤穂浪士の話は馴染み深い人も多いと思うがここでまた事件の顛末を簡単に述べよう。

元禄 14 年（1701 年）3 月 14 日、江戸城松之大廊下でたびたび嫌がらせを受けた浅野内匠頭が「個人的な遺恨」のために吉良上野介に対して刀を抜いて斬り殺そうとした。江戸城での不祥事を将軍徳川綱吉は許すことができなかったため、浅野内匠頭はその日のうちに「庭前での切腹」をさせられ、赤穂浅野家は断絶となった。それに対して、吉良上野介には何の罰もなかった。

この事件を報告され、赤穂藩士の内部には浅野家の再興を目指す大石内蔵助を代表とする「慎重派」と吉良への仇討ちを主張する堀部安兵衛を中心とする「急進派」の意見の対立が起こった。

元禄 15 年（1702 年）7 月 18 日、浅野大学の広島浅野宗家への預けが決まることによって、浅野家の再興は水の泡となった。その後、円山会議で大石内蔵助は吉野への仇討ちを決意し、それに同意した四十七人が参加することになった。

元禄 15 年（1702 年）12 月 14 日未明、四十七人の赤穂浪士は吉良の屋敷に討ち入って、主君の仇を晴らした。成功の後、浪士達は浅野内匠頭の墓所のある泉岳寺へ引き上げた。（この前後に寺坂吉右衛門が立ち退き、赤穂浪士は 46 人となった。）

大石内蔵助は討ち入りの経緯を幕府に報告して裁きを待つことにした。結果、浪士たちは江戸屋敷に分散し預けられ、「公義を恐れぬ行為として全員に切腹」が命じられた。

赤穂浪士の討ち入りが泰平の江戸時代の庶民にどれだけの感動を与えたかは容易に想像できるだろう。のちに討ち入りの話をもととする人形浄瑠璃『仮名手本忠臣蔵』が作成され、赤穂浪

士の忠義の精神が讃え続けられる。

賛美論に対して「公の法」の立場に立ち、赤穂浪士の討ち入りが「主従の情誼的結合における私の義」の行為だと批判する論説も出てきた。

私は赤穂浪士は命をかけて自分の理想を実現しようとした立派な武士だと思う。この理想とは無論「忠」「義」「勇」などの品格を兼ね備えて常に死の覚悟をしている真の武士になることだ。彼らの主君は地面で切腹をさせられた。この身分に相応しくない処分は一城の主にとってこの上ない恥であった。しかし、「喧嘩両成敗」の法制によって喧嘩を仕掛けられる側も責任をとるはずであったが、吉良は何の咎めも受けずに安穏と暮らしている。幕府の判決が不公平だと赤穂浪士が不満を感じるのも当たり前のことだ。主君は「控訴すべき上級裁判所をもたなかった」が、「忠義」な武士は武士らしい行動をとらないといけない。つまり、「当時存在したる唯一の最高裁判所たる敵討ちに訴える」べきであった。

敵討ちは命をかけた行為であり、「死をいさぎよくする覚悟ある武士にのみ可能」だと考えても言い過ぎではないだろう。四十七士は敵討ちに行く前には既に自らの運命を予測していたはずだ。失敗したら死ぬしかない。たとえ成功しても幕府に許してもらえないかもしれないと彼らはきっと覚悟したはずだ。それでも、毅然として立派な行動を取った。なぜなら、赤穂浪士はこの行動を通して主君への恩返しをしようとすると同時に、自分が「忠義勇」の徳目を持って名を惜しむ武士らしい武士であることを実証しようとしたからに違いない。

討ち入りの行為は赤穂浪士の死生観を表していたと私は思う。赤穂浪士が生きていたのは泰平の世であり、戦国の武士のように戦場で勇ましく戦い絶対的な献身を通じて自分の価値を実現することはできなかった。しかし、自分は死を恐れぬ武士らしい武士であることを実証しようとしたいと望んでいるのはいつでも同じだ。この意味から言えば、討ち入りの偶然性の中に必然性が交じっていると言えるだろう。赤穂浪士は常に死を覚悟して生を実感するという死生観を持っていたからこそ、いざという時、討ち入りという立派な行動を実現しえたのではないか。彼らは当時の法律によって死刑を宣告されたが歴史の裁判によっては新たな生命力を獲得したのである。

４、乃木希典―殉死

乃木希典は天皇の武士として明治時代に活躍していた。彼の一生はエピソードに富んでいる。乃木の死生観をよく理解する為にまず彼の人生を振り返ってみよう。

4．1　武士道思想の啓蒙―少年時代の乃木

幕末１８４９年、乃木希典は長州藩士乃木希次の三男として江戸麻布の毛利候上屋敷で産声をあげた。この屋敷はかつて赤穂四十七士のうち武林唯七など１０名が預けられ、５０日後切腹した場所であった。息子を武士に育て上げようとする父親は、当然ながら子供の乃木に桃太郎の物語の代わりに義士たちのことを聞かせた。乃木の心に一番早く根ざした英雄のイメージは赤穂義士であった。このことが青年期および後の乃木に与えた影響は計り知れない。

4．2　武士への道―乃木の軍歴

軍旗喪失

西南戦争の時、乃木は連隊を率いて熊本城に向かう途中、敵兵と衝突して、国のシンボルとして明治天皇より直接下賜された軍旗を敵に奪われてしまった。乃木は自ら先頭に立って軍旗を奪い返そうと必死であった。むしろその時の乃木は戦死を望んでいたのだろう。軍旗喪失という恥は乃木に終生の影を落とした。

留学後の変貌

ドイツ留学の間、ドイツの社会にはあまり溶け込んでいなかったものの、乃木はドイツの軍服や軍紀などに胸打たれて、帰国後、性格や作風が一変させた。過去の自分を反省して朝から晩まで軍服で押し通し、夜の豪遊も断った。つまり、武士道の精神を重んじて真の武士になろうと一生懸命努力したのだった。

日清戦争

1894 年、日清戦争が始まった。乃木は清国に派遣され、数々の戦いで勝利を収めていた。旅順などは一日で攻略した。「高潔と勁勇（強く勇ましいこと）の権化」となった。

日露戦争―旅順攻略戦

日清戦争の時、旅順を一日で落としたので、日露戦争で、乃木が又旅順に対する攻撃を命じられた。しかし、今度の乃木の戦略は大失敗であり、無数の兵の命を犠牲にした。ロシア軍の弱点とも言うべき場所である２０３高地を攻めるのは大本営の方針であったが、頑固な乃木がそれに反対して自分の戦略を貫いていたため、結局は死傷者の数が増えただけであった。最後はこの２０３高地は本部から代わりにやってきた児玉源太郎によって落とされた。ロシアのステッセル将軍はこれ以上無辜の犠牲者を出したくないとして抵抗をあきらめて乃木の前で降伏した。

4．3　武士の最期―乃木の自刃

１９１２年９月１３日−明治天皇の御大葬の日、遺体を載せた霊柩が宮城を出発する合図の号砲が鳴り響いた午後八時過ぎに、乃木は自宅で妻静子と共に切腹して殉死した。其の遺書には「明治十年役に於て軍旗ヲ失ひ、其後死処得度心掛候も其機ヲ得す」と書かれた。殉死という事件を知らされた人々の意見は賛否両論、実に様々であった。乃木の行為は時代錯誤であると考える人もいれば、乃木の切腹に感動し、明治天皇への忠誠を示した高尚な行為であると讃える人もかなり多くいた。「乃木大将の自刃はこの範囲の武士道から見ても、一点なんら間然する所なき立派なる武士的最期であると思う。」と新渡戸は賛美した。

乃木が最後に切腹を選んだのは決して一時的な衝動ではなく、それは武士道思想への固執の結果だと思う。まず、武士道は少年時代の乃木に深い影響を与えた。そして、青年期以後、乃木は武士への道を歩んで行って真の武士になろうと努力していた。乃木にとって、武士道は単なる規

範だけではなく、仏教やキリスト教のように一種宗教的な力を持っていたに違いない。この力が乃木の死生観を形成した。

軍旗喪失以来、乃木はずっと負い目を感じ、死のう死のうと思いながら苦しく生きてきた。真の武士、真の軍人として責任感がこれほど強いことは非常に感動的だ。また、天皇に対して殉死以上に立派な忠誠を示す行為は無いのだろう。明治政府の「廃刀令」によって武士の特権や地位が奪われていただけではなく、切腹や殉死の文化も失われつつあった。この時代の軍人にとって切腹は唯昔の武士の美しい伝説にすぎず、殉死も時代遅れの行為であるかもしれないが、廉恥を重んじるという武士の高尚な精神や人と人を結ぶ忠誠の絆は日本の土地に根ざして開花し、永遠に枯れないに違いないと私は信じる。

六、思想としての武士道

『葉隠』と『武道初心集』は武士道の名書としてよく知られている。その中で書かれた精神は大変深く難解なため、私はその主旨を正しくとらえられたとは言えない。ここで他の本（『武士の倫理近世から近代へ』と『武士行動の美学』）の助けを借りて得た私の一応の理解を述べよう。

１、『葉隠』の死生観

人間は誰でも生きることが好きだろう。死を喜んで迎える人がなかなかいないだろう。しかし、この人間にとって恐ろしいこと――死の訪れは人間の意志に左右されない。好きでも嫌いでも死の神が必ずいつかドアに叩きに来る。人間は逃げる場所がない。では、理想的な武士はこの逃れられない運命――死にどう対処すべきなのだろう。『葉隠』の武士道はそこに独特な発想を編み出した。

『葉隠』は江戸時代に、田代陣基が山本常朝の言葉を書き留めたものである。常朝は鍋島藩二代光茂が病死した時、既に殉死が禁止されていたので主君の後を追って死ねずに出家した武士であった。

「武士道といふは、死ぬ事と見付けたり。」この人々に膾炙している名句から『葉隠』は始まる。この名句は「常朝の教えのもっとも基本的なもの」だと考えられたが、言葉の中に潜んでいる謎を解くのは決して簡単ではない。「二つ二つの場にて、早く死ぬかたに片付くばかりなり。別に仔細なし。胸すわつて進むなり。図に当らぬは犬死などといふ事は、上方風の打ち上りたる武道なるべし。二つ二つの場にて、図に当るやうにわかることは、及ばざることなり。我人、生きる方がすきなり。多分すきの方に理が付くべし。若し図にはづれて生きたらば、腰抜けなり。この境危ふきなり。図にはづれて死にたらば、犬死気違なり。恥にはならず。これが武道に丈夫なり。」（聞書 1-2）と常朝は述べた。

こういうふうに理解してもいいだろう。人間は生きるか死ぬかの決定をせまられた時、ゆっくり情況を分析したりせずに早く死の道を選んだほうがいい。なぜなら、人間はやはり生きることが好きだからである。考える時間が与えられれば命への自然な執着心に駆られて人間は恐らく言い訳を探し、好きな様に理屈を付けて死すべき場合でも生を選ぶことになるに違いない。図に外

れて生きれば腰抜けになる。これは武士にとっては耐えられないことだ。しかし、図に外れて死んでも恥にはならない。これこそ武士にとって恥じなく正しい生き方だ。つまり、常朝にとって武士道は即ち「死ぬ事」であったのだ。また、「二つ二つの場」として喧嘩の場を語らないわけにはいかないだろう。

「何某、喧嘩打返しをせぬゆへ恥に成りたり。打返しの仕様は踏み懸けて切殺さるる事也。是にて恥にならず。死果すべきとおもふ故間に合はず。向うは大勢などいひ候時、時を移し、しまり止めに成る相談に極る也。(中略) 前方に吟味して置かねば行当たりて分別出来あい申さず故、大かた恥に成候。咄を聞き覚へ、物の本を見るも兼ての覚悟の為也。なかんずく、武道は今日の事も知らずと思ひて日々夜夜にヶ条を立て吟味すべき事也。時の行懸りにて勝負は有るべし。恥をかかぬ仕様は別なり。死ぬ迄也。其場で叶はざれば打返し也。是には知恵も要らぬ也。曲者といふは勝負を考えず、無二無三に死狂ひするばかり也。是にて夢覚る也。 (聞書 1-55)

ここでの意味は、喧嘩の場で、真の武士は死を恐れてはならず、もし喧嘩を売られたら打返さなければならない。打返さなければ恥に成るが、打返してたとえ殺されたとしても恥には成らない。勝負はその時の運なので、勝敗は考える必要がない。それよりも生の執着を断って「死狂い」することが武士にとって大切なことであり、最も望ましい生き方だということである。

いざという時、死地への突入―「死狂い」という行動をとれるように「毎朝毎夕、改めては死に死に、常住死身になる」という精神的な修行をしなければならない。

「必死の観念、一日仕限になすべし。毎朝身心を静め、弓、鉄砲、鑓、太刀にてずたずたになり、大浪に打ち取られ、大火の中に飛び入り、雷電に打ちひしがれ、大地震にてゆり込まれ、数千丈のほきに飛び込み、病死頓死の死期の心を観念し、毎朝懈怠無く死にて置くべし。古老のいふに、軒を出れば死人の中、門を出れば敵を見る、と也。用心の事にあらず、前方に死にて置く也。 (聞書 11-133)

こういう死の覚悟をして初めて「武道に自由を得、一生越度なく、家職を仕果」することができるのである。

２、『武道初心集』の死生観

『武道初心集』は『葉隠』と同じ年代に大道寺友山によって書かれた武士道理論だ。江戸時代には入ると「天下泰平の世」を迎えたので、武士は戦場で命が奪われる危険性がなくなるとともに安逸の気風が蔓延して戦国武士の死の覚悟も失われていった。この現実に対して友山は「天下静謐の世に生れ合たる武士」の正しい生き方と武士道のあり方を論じたのであった。

「武士たらむものは、正月元日の朝、雑煮の餅を祝ふとて、箸を取初るより、其年の大晦日の夕べに至るまで、日々夜夜、死を常に心にあつるを以て、本意の第一と仕候。死をさへ常に心にあて候へば、忠孝の二つの道にも相叶日、万の悪事災難をも遁れ、其身無病息災にして、寿命長久に剰へ其人柄までもよろしく罷成、其徳おほき事に候。」と『武道初心集』の冒頭で明示的かつ簡潔に理想的な武士の死生観を提示にしている。

真の武士は一刻も死を忘れてはならず、毎朝毎夕死ぬ覚悟をする必要がある。これは武士にと

って一番大切な心構えであり、この死というものを常に意識することで主君に対しては忠義を尽くすことができるし、親に対して孝行もできる。それだけでなく、すべての災難から逃れ出すことで、寿命が長くなることすら可能であるとしている。

友山は「万の悪事災難をも遁れる」という理由を、言行を慎まない人が厭な事を口に出して「口論」になる事や「無益」な遊楽の時に「不慮の喧嘩」になる事などは「死を忘れて油断」する心から起こる災いだ。常に死が心にある時、ものを言うのも返答するのも武士は「一言の甲乙を大事と心得る」ことによって、分けもない「口論」にもならないし、無益なところを人に誘われても行かないので喧嘩にもならない。だから、常に死が心にあるときは、万の悪事から自分の身を守ることになるのだとしている。

また「寿命長久」になるに対しては、人が死を忘れると、「過食」「大酒」「淫欲」などの「不養生」をし、脾腎がだめになって思いがけない「若死」にもなる。たとえ命をなくさなくても何の役にも立たない「病者」にすぎない。しかし、死を常に心にある時は、其の身体の年も若く、「無病息災」とは「補養」の「心得」をし、「飲食」も控えめにし、「色の道」から遠ざけて嗜みに慎んでいるので、其の身体も元気になる。だから「寿命までも長久」になると説明している。

人間はこの世に長く生きると、自然にいろいろな「望み」もできて、「人間の心が潮水の如く、飲めば飲むほど喉が渇く」と言ったように、「人の物」を「欲しがり」、自分の物を「惜しみ」、欲望がどんどん膨らんでいく。「死を常に心にあつる時は、貪欲の心もおのづから薄くなり、左のみさし出ざる道理に候。去に依て、其人柄までも宜しくなるとは申にて候」。ただし、いかに死が心にあっても「出家沙門」に行ってはいけない。「武道修行の本意」に背くからである。死を持って「主親へ忠孝の道」を捨て、「武士の家業」を放りだすことは認めていない。「昼夜を限らず公私の諸用を仕回ひ、しばらくも身の暇ありて心静なる時は、死の一字を思ひ出し、懈怠なく心にあてよと申事にて候」というのが友山の考えである。

『葉隠』と『武道初心集』の死生観の相違点：

二人の作者とも現実の世では畳の上の奉公しかできないと認識した上で戦国武士のように戦場で戦って潔く死ぬ機会が与えられない場合には、毎朝毎夕死ぬ覚悟をすることを通して生を実感し、主君に奉公することを求める。しかし、『葉隠』が死狂いの思想、「死身」になるという修行をすることで生死の選択を迫られた時、思慮分別せずに死地への突入ができることを目的としたのに対して、『武道初心集』が言ったのは死が常に心にあることによって災難に遭わずにすみ、長く生きられるということだ。つまり、『葉隠』は死ぬ覚悟をすることでいざという時、死を選べるようにということを大事にし、『武道初心集』は死ぬ事を考えることを通してよりよく生きられるようにということを重視している。

七、 武士道の死生観の特徴

武士が活躍する時代を大きく分けると戦乱の中世と泰平な近世となる。中世武士の死生観は「死」に重点を置く。中世は戦乱の時代であり、武士が活躍する主要な場所は戦場であるから、

いつ死ぬか分からない。そのため、武士の死生観には一種の宿命論が含まれている。この時代の武士はどうやって死んでいくか、死んだ後、どういう形でこの世に残るかを大事に考えていた。どうせ死なざるをえないので、命に執念してはいけない。散る桜のように躊躇わずに潔く死ぬのが一番望ましい死に方だと考えられていた。死んだ後に残るのは生きていたときの「忠」「義」「勇」の徳を重んじる「名誉」だ。名誉はむなしいものだが永遠に朽ちないので、命より大切だったのである。

それに対して、近世武士の死生観は「生」に焦点を当てる。近世は泰平の時代であるから、戦場で戦う必要がなくなるにつれて、戦死したりする可能性も低くなる。中世武士のように命の儚さがつくづく感じられなくなっていた。この時代の武士には、死を思うことによって生をよりよく有意義にさせようとする態度を持つのが理想的であるとされた。

中世武士が命より惜しんだ名誉と同じ意味の「廉恥」を近世武士は重んじた。「この変化は、勿論儒教的教養の浸透のみを以て理解されるものではない。戦乱の時代から、所謂太平な時代への移行、戦闘員から為政者・人倫の指導者への武士の社会的性格の移行、さらにはこれらと関連して、武士社会における武勇よりより道義的徳性への関心の移行などが考えられる。」と相良享が分析している。「廉恥」を重んじるからこそ、武士らしくないことを絶対やってはいけないと武士が自らに厳しく要求する。それによって、「畳の上の奉公」しかできないが、毎日死の覚悟をし、死んだつもりで生を実感して主君に仕えるということをしていたのである。

時代や個人によって武士の死生観が微妙に違うが、全体的に見れば、武士である以上、皆武士らしい武士になろうという理想に命をかけ、理想の為に献身した。源平武将にしろ、楠木正成にしろ、赤穂浪士にしろ、乃木希典にしろ、この異なる時代に生きていた武士達は同じ理想を抱いていたと言えるだろう。すなわち、「忠」「義」「勇」などの精神を常に胸に秘めて名誉を重んじる真の武士になるということだ。『葉隠』と『武道初心集』の思想はだいぶ異なるのだが、二つとも理想的な武士の生き方を求めようとするものであった。武士は生にこだわらないが理想には執着する。「生」とはただ命を持って生きているだけにとどまらず、また、「死」もただ命をおとしたり、心臓の動きが止まったりするだけを意味するものではない。どういうふうに生きていけばいいか、またどういうふうに死んだらいいか、死んだ後、どういう形でこの世に残るかということを武士は真剣に考える。武士の死生観に一つのキーワードがあるとしたら私は「美」という字が最も適切だと思う。美しく生きる、美しく死ぬ、また美しい名声を後世に残す。これは武士の美しい理想だ。

八、武士道の死生観に影響を及ぶ思想

１、武士道と禅

刀を携えて戦場で勇ましく戦う武士はどうしても殺気立っているというイメージから逃れられない。武士の魂と言える刀も畢竟人を殺す道具の一つだからだ。この点から見れば武士道は［慈悲を旨とする］仏教の思想と背馳すると思われがちである。しかし、仏教-特に禅の教えを抜か

しては武士道を語れないほど両者は緊密な関係を持っているのだ。武士道と禅の関係については山岡鉄舟の話がなかなか有名であるので、ここで取り上げてみよう。山岡鉄舟は元徳川家の指南番の某の門人として撃剣をやったが、いくら修行しても順調に上達しなかった。そんな彼は、鎌倉円覚寺に行き、今北洪川和尚に訪ねて参禅しようとした。その時授けられた禅の公案は［両刃鋒を交へて相避けず］であった。この公案は曹洞宗の中興の祖師と言われた洞山大師の五位というものの中にある。これを授かって三年間じっと端座し、随分苦心した末にやっと納得できた。即ちこの公案の意味は［剣が相交じつたところには、人といふものもなく我といふものも無い］であるという。この意味を悟った彼は自由自在に武術を発揮し、もとの先生にも勝ったという話だ。

この挿話から武士道と禅はどれだけ深い関係があるかということが分かると思う。実は武士道の死生観は禅から受けた影響が最も大きいと思われる。生死というのは大自然の恒久不変な規律の一つにすぎなく別に奥深いことでもないが、人間としてはなかなか平気でこの事実を受け入れられない。一秒でも長く長生きしたいという野望に駆られた人間にとって死はあまりに恐ろしいことだ。所詮死ねばならないからと、泰然自若として死を迎えて、死ぬ事を帰ることと見なしている武士の死生観を形成させる重要な要素と考えられるのは禅の「生死透脱」の性格である。

では、生死透脱はいったいどのような思想だろうか。禅の生死についてこういう話がある。

「生死ノナカニ仏アレバ、生死ナシ、マタイワク、生死ノナカニ仏ナケレバ、生死ニマドハズ。

生死ノ挙体スナワチ仏ナルヲモツテ、生死アルコトナシ、仏ノ挙体ガスナワチ生死ナルガ故ヒ、生死ニマドハザルナリ」

生死の問題を悟ろうと思ったら、まずこの言葉の意味を明らかにしなければいけない。仏が生死を解脱した人だというのは既に知っていることである。解脱の意味は決して逃れるという意味ではなく、それは生死にこだわらないことだと理解する。「仏は生死の中にある」とも、「仏が生死の中にない」ともいう。

さらに「世界法中、実有生死、実相法中、無有生死、復次生死人有生死、不生不滅人無生死、何以故、不生死人以大智慧能破生死相」という話もある。

つまり生死透脱の本質は透脱すべき生死がないということだ。生死を逃れようとしても、生死を求めようとしても、解脱する事はできない。生死の事を一生懸命わかろうとするのはまだ生死に執着するということだ。これはただ仏の心から遠ざかるだけだ。自分の身や心や生死を忘れて初めて解脱できるのだ。

この禅を思想によく薫陶を受けるのが鎌倉武士だと思われる。鎌倉武士を代表する中心人物といえば迷わず頼朝と時頼を挙げるべきであろう。［生るるも一時、死ぬるも一時、善悪の間も亦一時なり、之れを知るものは乾こんに自由自在を得るなり］という頼朝の心境は「生死透脱」の思想と本質的には一致することは一目瞭然だろう。死の到来を自覚して身に袈裟を着て座禅しながらこの世を去っていく時頼の詩も同じ宗旨を持っている。「業鏡高懸　三十七年　一槌打砕大道坦然」。死に直面する時、恐れずに躊躇わずに潔く死ぬという武士の死生観は禅の生死から深い影響を受けているのだ。

２、無常観

無常観というものはもともとはインドのお釈迦様の哲学だ。簡単に言えば、世界万物が刻々に変幻しつつあり、永遠に替わらないものはこの世には存在しないというものだ。この仏教の無常観は日本に入ると、日本人の特有の繊細な感受性によって変質されて日本人のものの考え方を導くようになり、見過ごしてはならないほどの思想の本源となった。

なぜ無常観は日本人の心をとらえる力を持っていたかを分析する時、まず考えられるのは日本の地理上の環境だ。中国のことわざで言えば［一方水土に一方人が養育される］。日本民族は生存空間が限られている島国に生活している。歴史上無数の火山噴火と地震の壊滅的打撃を受けていたため、潜意識の中に予測し難く抵抗できない自然の破壊力に対して儚く悲しい宿命や無常の観念が育まれている。すべてのものは不意にやってくる災難に逢うと、たちまち灰燼に帰してしまう。命もそうだ。今日は持っているが明日になったらどうなるかわからない。だから生命がいつまでも続くと考えてはいけない。

日本人は桜が好きだ。「敷島の大和心を人問はば　朝日に匂ふ山桜花」と歌われたように桜と大和民族の精神の間に一種奇妙なつながりが潜んでいる。桜は咲いている時、確かに表現しよもないほど美しいが、開花期がとても短くて本当にきれいなのはたった一週間だけぐらいである。まだ花見していないうちに散ってしまう。しかし、日本人は時節が来ると風の中に散っていく桜の潔さに感動する。さらに桜の花を人生に喩える。生きるうちにできるだけ光や熱を放って命を輝かせ、生命の終点に着いたら桜のように躊躇わずに潔く死んでいく。命を惜しんではいけない。死こそ誰でも必ず経由する道だから。人生は長くても百年以上続かない。早かれ遅かれ必ずいつかは死ぬ。「散る桜残る櫻も散る櫻」短い俳句だが深奥な人生哲理が含まれている。人生の無常に対する感嘆も読み取れる。

哲人ケーベルはこの日本の美しい精神をよく理解していたと思われる。「櫻の花の頃こそ日本人を観察すべき時である。これ、その牧歌的哀歌的なる天性の最も明かに現れる季節だからである。日本の国民的花は、堅い硬ばった、魂なき、萎むを知らざる菊ではない。絹の如く柔らかなる、華奢なる、芳香馥郁たる、短命なる桜花こそ実にその象徴である。日本人はこの美しき花の、束の間に萎み、さうして散りゆくその中に、わが生の無常迅速の譬喩と、我が美と青春との果敢なさを見るのである。桜の花を眺めている時、春のただ中、に秋の気分が彼の胸に忍び入る」と彼は言った。

桜が美しく咲いてまた早く散るというごく普通の大自然の現象を通じて人生の無常を感じる。この民族の伝統意識や思想が武士の死生観に一定の影響を与えたのではないかと私は思う。有限な人生に無限の意義を賦与させるために、武士は生きているうちに「忠」「誠」「礼」「義」「仁」「勇」などの精神を血液にして鍛えて武士らしい武士になろうと必死に努力している。いざという時、恥をかかないように美しく死ぬ。桜の瞬間の美のように人に強い印象を与え香しい名声を後世に残す。故に、「花は桜木、人は武士」と古代から言い続けられる。「散るもよし芳野の山の山櫻花にたぐへし武士の身は」と歌われたように、こうして国花に選ばれる桜は日本の美しい

精神―武士道を代表するようになったのだ。

九、 武士道の死生観の現代的意義

さて、武士道の死生観が現代社会に生きていく私たちにどんな智慧を啓発してくれるのだろうか。まず、現代人の心の持ち方や生活の実態を振り返りながら反省しないといけないと思う。「今の日本に溢れているのは汚い金と燃えないゴミぐらいだ。人々は心が空っぽだから、もので埋め合わせしているのよ。だから、いらないものばかり作って世界はどんどん醜くなっていく。」これはあるアニメ（「クレヨンしんちゃん嵐を呼ぶ猛烈！大人帝国の逆襲」）の中の台詞であり、今の状態を鋭く指摘している点で深く印象に残っている。まさにその通りである。現代生活の早いリズムに合わせるように私たちも自然に歩調を速めて息をつく暇さえないぐらい毎日忙しく［奮闘］している。しかし、金銭や利益を追求するために必死に頑張っている人々は一つの重要な事実を忘れてしまったのではないか。それは、死がいつか必ず訪れるということだ。命がいつまでも続いているのではないと思ったらつまらないことに時間や精力を費やすことはしないだろう。常に死を覚悟して生を実感していこうと何百年前の武士が理解していたことがなぜ経済や科学が高度発達している現代社会に生きている私たちには全く分からないのだろう。

無論、主君に忠義を尽くしいざという時、命も喜んで捧げるという武士の信念は特定の時代に要求されたものだ。平和な社会に生活している私たちが命は自分のものだと考えて大切にしようとしても非難すべきほどでもない。しかし「死を凝視することによって生を充実させていく」という死生観はどの時代の人にとっても積極的な意義があると思う。特に、お金イコール幸せだと誤解している現代の人々は物質の豊かさばかりを求めて、もう十分豊かな生活を送っているのに周りのもっと豊かな人を見たら自分が不幸に思えてしまう。しかし、実は、本当の幸せは豊かな心にあるのだ。元気な時、いつも死ということから離れていると思い込み、欲望が満たされなかったら苦しんだりして「成功」の人生ばかりに憧れている。いつか命が奪われてすべてがゼロになるかもしれないと考えたら、ただの取り越し苦労や悲観的だと批評されるだけだ。現代人に早い足取りを止めて冷静に死のこと考え、淡泊で安らかな心を取り戻してほしい。是こそ幸せになる正しい道なのだ。

十、 おわりに

今回の武士道の死生観についての勉強を通して、私は死に対する態度や見方が少し変わってきた。前は多くの人と同じ様に、死に対してマイナスなイメージを持っていた。「死」に関する言葉も何となく縁起が悪いような気がしてなるべく口に出さないように気をつけていた。自殺の願望がある人しか死という事を考えないと思っていた。しかし、今度の勉強のおかげで以前の考えがとても未熟で間違っていたとわかった。死という事を一度も頭の中で真剣に考えたことのない人はきっと生という事に対しても十分理解できていないはずだ。死の瀬戸際から命を救ってもらった人たちは一般的には人生に対して豁然として悟ると言われるように、心の中で一度死んだほうがどう生きて行けばいいか、明確にわかるかもしれない。死生観とは、自分が死んだ後に自分

をどういう形でこの世に残したいのかを考える上で、そのために今をどう生きるかを探ることだ。常に死を覚悟して生を実感するという死生観は、武士道の精神の中に脈々と流れている。私はこの日本古来の美しい精神から知恵を汲み取り、自分の人生にも生かすことができればと思う。

参考文献：

『武士道』新渡戸稲造著　岩波文庫　2005 年
『武士道の神髄』武士道学会編　帝国書籍協会　1941 年
『武士道全書』第一、二巻　植木直一郎編　東京時代社版　1942 年
『武士の倫理近世から近代へ』相良享著　ぺりかん社　1993 年
『武士行動の美学』小沢富夫著　玉川大学出版部　1994 年
『禅と武士道』横尾賢宗著　修養文庫　1934 年
『日本武士道詳論』磯野清著　東京目黒書店　1934 年
『日本的生死観』渋川敬応著　興教書院　1942 年
『日本人の死生観』加藤周一　M・ライシュ　R・J・リフトン著　岩波新書　1997 年